

春の伝道礼拝第1回 (5月11日)

互いに真実を

小海 基



ゼカリヤ書 第8章16～18節

エフェソの信徒への手紙第4章25節

5月の伝道月間のテーマは「互いに愛する」です。本日選んだのは、ゼカリヤの預言の言葉「互いに真実を語り合え」「互いに心の中で悪をたくらむな」です。

預言者ゼカリヤは、今私たちが連続講解説教で読んでいるイザヤ書40～55章までの「第2イザヤ」と呼ばれている初代イザヤの弟子とほぼ同じ頃の預言者です。紀元前539年にバビロニア帝国はペルシャ王国のキュロス王の軍隊の前に無血開城し歴史から姿を消します。翌紀元前538年にキュロス王は勅令を出し諸国からバビロニアに奴隷として連れて来られた民は(南ユダの国民だけでも男性

で五千人もいました。その人たちがバビロニアの地で結婚し家族を増やしていました、それぞれの故郷に帰りバビロニアによって略奪された祭具を返され、自分達の神殿を再建し礼拝して良いとされました。第一陣としてすぐ帰った人たちもいたのですが、エルサレム神殿再建はなかなか進みません。預言者ゼカリヤやその前のハガイの時代は、キュロス王の勅令が出てから20年近く過ぎた頃です。ペルシャ王もキュロス王から次のダレイオス王になつていて時代です。ゼカリヤ書1章～8章が第2イザヤと同じ時代でゼカリヤ本人の預言で、9章以下はその弟子が引継ぎ語った預言です。ゼカリヤは祭司の家系に生まれた人だからこそエルサレム神殿再建を熱く預言したのです。

聖書の信仰、キリスト教の信仰は独りぼつちの個人的なものではありません。「互いに」とここでゼカリヤは神の預言を伝えていますが互いに向かい合う相手、共に生きる仲間とともに神の言葉を囲んでこそその信仰です。「2人また

は3人がわたしの名によって集まるところに」(マタイ18・20)主イエスは共におられるという信仰です。その中に真実がなければなりません。

オウム真理教事件の時に狭いスペースでたつた一人こもつての特別な修行が問題になりました。それは誤った信仰です。信仰の世界は殉教や生涯をかけるという面があります。だからこそ「互いに」一人ではなく仲間がいることが大切なのです。「あなたの内側にいるキリストより、あなたと対面している兄弟姉妹の語るキリストの方がはるかに大きい」(ボンヘッファー)ということが大切なのです。

NHKの朝ドラ「あんぱん」で、出征する石屋の豪ちゃんが主人公の妹と結婚するシーンが話題になりました。私はデートリッヒ・ボンヘッファー牧師のことを思い起こしました。今年はD・ボンヘッファー牧師が強制絶滅収容所で処刑されて80年です。1996年に婚約者マリーア・フォン・グアデマイヤーとの往復書簡が日本語で

出版されました。デートリッヒ・ボンヘッファーとマリーアは年の差18歳。ボンヘッファー自身は37歳までしか生きられないだろうと語っていたといひます。まさに37歳でマリーアに出会いました。マリーアはプロイセン貴族の家系。デートリッヒは父親がベルリン大学の医学部精神科教授と家庭環境が違っていました。二人は出会って一年後に婚約しますが、彼は直後に逮捕され、3年後の1945年4月に処刑されてしまひます。マリーアはドイツ敗戦後、アメリカに渡り、ハニウエルの有能な女性実業家として成功。2度結婚し2度とも離婚して1977年に癌で生涯を閉じました。獄中を隔てた二人の往復書簡が日の目を見るに至ったことはまことに「奇跡」と思えるほどの出来事だったのです。

1945年1月に東から迫ってくるソ連軍に追われるようにマリーアがベーチヒの莊園を脱出したとき、救い出すことができた唯一の財産がボンヘッファーとの往復書簡の束でした(マリーアの

出した手紙は獄中秘かなルートを
使ってボンヘッファアの両親の家
に送り返され、さらにマリニアの
手元に戻されていたのです。彼
女はこれらの手紙をあらゆる破壊
から守るために自分の体に巻き付
けて、避難民の隊列に加わったの
でした。彼女はのちにこれらの手
紙を木箱の中に収め封印したまま
保管していました。2回結婚、離
婚を繰り返しながら保存しつづ
けました。戦後ボンヘッファアが有
名になるにつれて、多くの研究者
や関係者からその手紙も重要な資
料価値があるので公開してほしい
という要請が繰り返さるようにな
りました。しかし彼女自身は、自
分の生存中には公開しない、死
後はハーバード大学ホートン図
書館に全部寄贈する、死後25年間
(2002年まで)は公開しない
で欲しいと遺言していたのです。
途中1967年にユニオン神学校
はそのごく一部を公開しました。

もこの遺稿集を生きているうち
に目にすることはあるまいと覚悟
していたものです。しかしマリ
ニアに付き添っていた姉ルース・ア
リーセ・フォン・ビスマルクがマ
リアの臨終の床で10年早く公開
の許可が与えられ、私たちは公に
マリニアの視点でボンヘッファ
アの書簡を読み直すことができるよ
うになりました。そして1991
年に開かれたユニオン神学校での
国際ボンヘッファア学会で遺族が
遺言より10年早く公開しました。
92年ドイツ語版、94年英語版、96
年日本語版が出版されました。ボ
ンヘッファアはテゲルの獄中か
ら1943年8月12日に婚約を決
意してマリニアに宛てて書いてい
ます「神はこの世がわれわれにも
たらずありとあらゆる苦難にもか
かわらず、この世を愛し、この世
にたいして忠実でありつづける信
仰を贈ってくださいなのです」。

「僕たちの結婚は神の大地にた
いする一つの然りであるべきで
す。この結婚は、この世で僕たち
が何かを創造し、何かの活動をす
る勇気を強めるべきものなので
す」。これに対するマリニアの返
事では、「神の大地にたいする一
つの然りであるべきです」という
ボンヘッファアの言葉を引いて
「あなたは、すばらしく言ってく
ださいました。ディートリヒほん
とうにありがとう」。

マリニアは1977年に癌を
患って亡くなる直前に、あらため
てこの手紙を取り出して読み直し
ました。付き添っていた姉のルー
ト・アリーセ・フォン・ビスマル
ク夫人に、自分が亡くなった後で
公開することを依頼するのです。
マリニアはそのとき再読した感動
をこう漏らしたのでした。「彼は
ほんとうに私を愛してくれていた
のですね」と。息を引き取る直前
に傍らの姉にうわごとのように言
いました。「私の結婚衣装はもう
届けられましたか」。マリニアは
天国でボンヘッファアとの結婚式
を夢みていたのでしょうか。

ボンヘッファアが書き残した言
葉として「意志としての樂觀主
義」があります。それはたとえ地
上世界がどんなに「混沌・無秩序、
カタストロフ」であったとしても
も諦めて既成事実へと屈服してし
まうのでもなければ、また新しい
建設や未来の世代に対する責任を
放棄してしまう「現世逃避」でも
なく、たとえ人びとが諦めている
ところでも「希望する力」、いつ
さいが失敗したと見えるときにも
「頭を高く上げる力」、反動に「耐
える力」、「将来をけつして敵に譲
り渡さない。それを自分のものと
して要求する力」だと彼は言うの
です。それが「意志としての樂觀
主義」です。

神はすべてのものから、最悪の
ものからさえも善きものを生まれ
させることができ、それを望まれ
るということを私たちはボンヘッ
ファアと共に信じます。そのた
め神はすべてのことを自らにとつ
て益となるように役立たせる人間
を必要とされます。「意志として
の樂觀主義」をもつて「互いに真
実」に愛することは意義深いこと
です。神さまは私たちをそうした
道へと導いてくださいます。
(出席31名。文責・編集委員会。
要約担当・菅野静恵)